

Osaka Mozart Ensemble
68. Konzert

300. Geburtstag von Leopold Mozart

Solofagott

Mai Tsuneda

Konzertmeister

Masato Ohnishi

Orchester

Osaka Mozart Ensemble

14.00 Uhr Sonntag, 20. Jänner 2019

Neyagawa Municipal Arukas Hall

《Programm》

Johann Christian Bach (1735-1782)

ヨハン・クリスティアン・バッハ

Sinfonia F-Dur Op. 3, Nr. 5 (1765)

交響曲 ヘ長調 Op.3, Nr. 5

I . Allegro

II. Andante

III. Allegro assai

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Konzert für Fagott und Orchester B-Dur KV 191 (186e) (1774)

ファゴットと管弦楽のための協奏曲 変ロ長調 KV 191 (186e)

I . Allegro

II . Andante ma adagio

III. RONDO: Tempo di Menuetto

…… 休憩 Pause ……

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Sinfonie Nr. 1 Es-Dur KV 16 (1764)

交響曲 第1番 変ホ長調 KV 16

I . Molto allegro

II . Andante

III. Presto

Leopold Mozart (1719-1787)

レーオポルト・モーツァルト

Sinfonie B-Dur VII:B6 [KV 17 (Anh. C 11.02)] (spätestens 1768/ spätestens 1756?)

交響曲 変ロ長調 VII:B6 [KV 17 (Anh. C 11.02)]

I . Allegro

II . (Andante)

III. MENUETTO I – MENUETTO II

IV. Presto

《Einführung》

常田 麻衣 Mai Tsuneda, Fagott

兵庫県尼崎市出身。

兵庫県立西宮高等学校音楽科卒業、東京藝術大学卒業。

卒業時に同声会賞を受賞。

第30回日本管打楽器コンクール・ファゴット部門第1位ならびに

文部科学大臣賞、東京都知事賞を受賞。特別大賞演奏会にて

東京ニューシティー管弦楽団とモーツァルトのファゴット協奏曲を共演。

平成25年度優秀学生顕彰、文化芸術分野にて大賞を受賞。

西宮音楽協会会員。

ヤマハインストラクター。

兵庫県立西宮高等学校、音楽科特別非常勤講師。

関西を中心に、オーケストラや吹奏楽での客演、室内楽などの音楽活動、

中高生への指導を積極的に行っている。



大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を行っている。指揮者を置かずに自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリンツ氏、アダルベルト・スコッチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスベトラ・プロティッチ氏と4回共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。

1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7回出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルトウム大ホール、ヴィーン・ミラーテン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5回出演。2004年、指揮者なしでのモーツァルトの交響曲全曲演奏を20年かけて完結した。

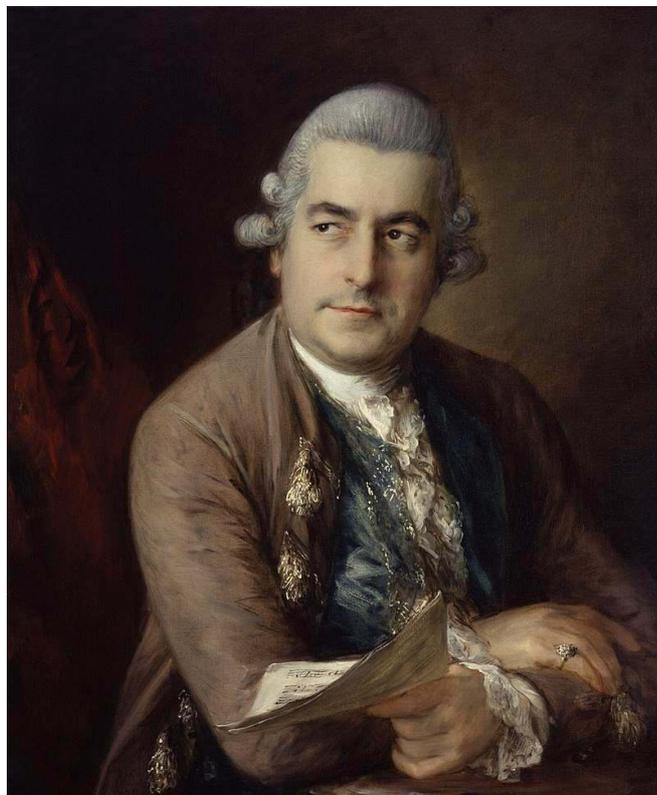


レーオポルト・モーツァルト生誕300周年

ロンドンのモーツァルト 大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩



レーオポルト・モーツァルト
(1719年11月14日 - 1787年5月28日)



ヨハン・クリスティアン・バッハ
(1735年9月5日 - 1782年1月1日)

1764年4月10日、ヨハン・ゲオルク・レーオポルト・モーツァルトは、妻マリア・アンナと二人の子供たち、12歳のマリア・アンナ（愛称ナンネルル）と8歳のヴォルフガングを連れて、熱狂的に迎えられたパリを出発した。向かう先はロンドン。ドーヴァー海峡（カレ海峡）を目にしたナンネルルは日記に「カレで私は海の潮の干満をみました。」と記している。山に囲まれたザルツブルクで育った子供たちは初めて海を見たのであろう。ドーヴァー海峡を渡るために10から12台しかベッドがないのに14人が予約していた定期船をあきらめ、特別に船をチャーターした。4月25日に、故郷ザルツブルクの家主ヨハン・ローレンツ・ハーゲナウアーに宛てた手紙に、ドーヴァー海峡のことをふざけてザルツブルク近郊の小村にある小川の名前で呼んでいる。

私どもは、さいわいなことに、無事マックスグラーン村の小川を超えてやってまいりましたが、失礼ながら食物を戻すことなしにすまされず、私もほとんど全部戻してしまいました。でも、吐剤を服用するお金は節約になりましたし、私どもはおかげさまで一同元気です。お金がありすぎる者は、パリからロンドンにひとつ旅行でもやってみるといいでしょう。確実に財布が軽くなりますよ。

4月23日、一家はロンドンに到着した。そこでヨハン・セバスティアン・バッハ（大バッハ）の末っ子（第11子）、ヨハン・クリスティアン・バッハと出会う。ヨハン・クリスティアン・バッハはカール・フリードリッヒ・アーベルと1764年2月から約20年に渡って、定期的な演奏会、いわゆるバッハ＝アーベル・コンサートを開催した。この演奏会を通して、モーツァルトは彼らの交響曲や協奏曲、室内楽を知ることになった。モーツァルトはバッハから彼がロンドンで確立した新しい形式の交響曲作曲の手ほどきを受けた。本日演奏するヨハン・クリスティアン・バッハ作曲の交響曲へ長調 Op. 3 Nr. 5は、1765年に出版された作品の1つで、ロンドン・ソーホーのディーンストリート、キングスクエアコートの彼の家で販売された「6つの交響曲」作品3の5番目の交響曲である。一連の交響曲は、1765年1月23日から3月20日にかけてソーホー・スクエアのサットン・ストリートにあるテレザ・コーネリス夫人のカーライ

ルハウスで水曜日ごとに定期的開催されたバッハ＝アーベル・コンサートで演奏された。その後、4月3日にウェルカーから出版のアナウンスがなされている。ロンドンに滞在中のモーツァルトはこの交響曲を聞いたはずである。

当時のヨハン・クリスティアン・バッハとモーツァルトの関係を示すものとして、法律家兼自然科学者であったデインズ・バリントンが、1765年6月にモーツァルトの楽才をテストしたときの模様を仔細に記述したイギリス学士院へのかなり長い報告書がある。この報告書は1770年2月15日に学士院で朗読された後、翌1771年に学士院が刊行している「哲学紀要」に掲載された。そこには、次のように記載されている。

著名な作曲家でありますバッハが、フーガを弾きはじめ、これを突然中断いたしますと、幼いモーツァルトがただちにそれを取り上げ、まことに見事な仕方で仕上げました。

また、パリを出発する際、ナンネルルには金時計をヴォルフガンクには果物ナイフ（締め金は金に螺鈿がはめてあり、一つは金の、もう一つは銀の鈴がついていた）をプレゼントしたフリードリヒ・メルキオール・フォン・グリム男爵は、1766年7月、「文芸通信」に次のように報告している。

ロンドンでは、バッハが彼を膝に抱き、二人はこうして暗譜で、交互に二時間もたてつづけに、国王および王妃の御前で、同じクラヴサンで演奏したものであります。

13年後、モーツァルトは1778年8月にヨハン・クリスティアン・バッハとパリで再会する。母親の客死から1か月後、失意の真ただ中だった。その時の喜びを8月27日付の父への手紙で語っている。

ロンドンのバッハさんが当地へ来て、すでに二週間になります。彼はフランス語オペラを書く予定です。——当地には、ただ歌手を聴きに来たわけで、そのあとロンドンに戻り、作品を書き上げてから、もう一度舞台にかけるために来るでしょう。——ぼくらが再会したときの彼のよろこびとぼくのよろこびがどんなだったか、容易に想像してもらえますね。——ことによると彼のよろこびは、それほど本心ではなかったかもしれませんが——それにしても彼は誠実なひとであり、他人に対して公平であろうとしていることは認めなくてはなりません。ぼくは（ご存知の通り）彼を心の底から愛していますし——絶大に尊敬しています。——そして彼のほうでは、ぼく自身の面前でも他の人たちに対したときでも、同じようにぼくを称讃していることは疑いない事実です。——それも、誰かさんのように誇張ではなくて、真面目に——ありのままにです。

ヨハン・クリスティアン・バッハは、1782年1月1日に46歳で亡くなった。当時、ヴィーンに住んでいたモーツァルトは、4月10日に故郷ザルツブルクの父に宛てて次のような手紙を送っている。

ぼくはいま、バッハのフーガを集めています。ゼバスティアンの作品だけでなく、エマーヌエルやフリーデマン・バッハのも含めてです。——それからヘンデルのも。——（中略）——イギリスのバッハが亡くなったことはもう御存知ですね？——音楽界にとってなんといい損失でしょう！

さて、ロンドンのモーツァルトに話を戻そう。一家がロンドンに滞在中、レーオポルトは高熱と疼痛を伴う重い病気にかかったため、子供たちへの音楽の指導は中断されたが、そんな中で生まれたのが、**交響曲第1番変ホ長調 KV 16**である。最初の交響曲が作曲された経緯を、後年、姉のマリア・アンナが「一般音楽新聞」（ライプツィヒ、1800年1月20日号）で伝えている。

ロンドンで、私の父があやうく死にかけるほどの病気にかかったとき、私たちはクラヴィアに触れることは許されませんでした。そこで勉強のために、モーツァルトはあらゆる楽器——とくにトランペットとティンパニを伴う最初の交響曲を作曲しました。私は彼のそばに坐って、この曲を書き写さねばなりませんでした。彼が作曲し、私が写している間、彼は私にこう言ったものでした。《ヴァルトホルンにぴったりのことができるようにぼくに注意してね！》



交響曲第1番変木長調 KV 16の自筆譜

自筆譜の表紙には、おそらくレーオポルトの手により、Sinfonia / di / Sig: Wolfgang / Mozart / a london / 1764'と書き込まれており、楽譜にはレーオポルトの修正が見受けられる。「弟が作曲し、姉が写した」というのは、姉が弟の自筆譜を清書したのではなく、パート譜を作成したのではないと思われる。何故なら、レーオポルトとナンネルにより作られたこの時期の他の交響曲（KV 19, 19a, 45a）のパート譜のセットが残っているからである。後述するようにロンドンで写譜屋にパート譜を作成させると高額な費用を要した。交響曲第1番変木長調 KV 16用の当時のパート譜は現存していないが、自筆譜では判別できない音符もあることから、パート譜を作成する過程においてもモーツァルトは父親の指導のもとで、時間をかけて徹底的に推敲を重ねていったのであろう。姉は、トランペットとティンパニを伴うと回想しているが、交響曲第1番変木長調 KV 16にはトランペットとティンパニは使われていない。しかし、当時、トランペットとティンパニは総譜とは別の楽譜に書かれることも多かったため、現存する自筆譜には表れていないだけかもしれないし、姉の回想は36年前のことなので、単に思い違いかもしれない。

レーオポルトがあやうく死にかけるほどの病氣とはどんなものだったのであろうか。彼が1764年8月3日と9日付のローレンツ・ハーゲナウアーに宛てた手紙によると、浣腸をし、下剤をかけ、首に烈しい炎症が出たため、瀉血も行われたが、胃はなにも受け付けず、分別をもって考えられなくなったので、健康回復を祈願して、ザルツブルクのマリア・プライン教会にミサを7回、ロレート教会の幼子イエスさまに7回、ノンベルク教会の聖ヴァルブルギスさまに2回、聖ペテロ教会の聖ヴォルフガングス礼拝堂でミサを2回、パッサウのマリア・ヒルツ教会でミサを4回捧げられるよう、取り計らってほしいと伝えている。9月13日付の手紙では、ミサを捧げるのを几帳面に守ってくれたことに対するお礼と、そのおかげでたいへんゆつくりとではあるが、日一日と良くなってきていることを伝えている。

レーオポルトは、当地の「冷え」と呼ばれる風土病に罹患していると、彼自らが、フェブリス・レンタ（慢性熱）と名付けたこの病気は、内臓の悪い人は肺癆に至るが、海を渡って帰国すれば治ることが多いと述べている。

好天気だった7月6日は日曜日で暑かったが、馬車が一台もなかったので、夕方6時にサーニト卿を訪ねるために子供たちを駕籠に寄せ、肥った自分は後からついていったが、ぐっしょり汗をかいた。当地は夏といえども、夏着をつける人はおらず、みんな羅紗の衣服をつけているが、自分は持っていなかったので体が冷えて気分が悪くなってしまった。7月14日まで歩き回って発汗で病気を治そうとしたが、無駄だった。扁桃腺が真っ赤に腫れて炎症を起こし、激しい喉の痛みを感じたのでうがいをしたが全く役に立たず、瀉血をしたところ、痛みが和らいだ。しかし、高熱は続き、食欲はなく、7月23日の夜中は胃がびっくりするほどの痛みを感じて目を覚まして、一睡もできない夜を過ごした。医者からは桂皮、ニガヨモギ、アヘンなどが処方され、8月6日には療養のためにテムズ河畔の村チェルシーのファイブ・フィールズ・ロウにあるランダル博士の家に移り、9月25日頃まで滞在した。その間、クラヴィアに触れることが許されなかった幼いヴォルフガングは、初めての交響曲を作曲することになったのである。レーオポルトがハーゲナウアーに宛てた1765年2月8日付の手紙のなかで、ヴォルフガングの交響曲が2月15日の演奏会で取り上げられることを知らせているので、ほぼ半年かけてこの交響曲を完成させたのではないと思われる。

演奏会で取り上げられる交響曲は、すべてヴォルフガング・モーツァルトのもので、1ページに1シリング払いたくなければ、私は自分でそれらを写譜しなければなりません。

当地では写譜はいい商売でして、エストリンガー[ファゴット奏者で写譜屋、当時モーツァルト家の下働きをしていた]には笑いごとまらないでしょう。彼にお祝いの言葉を述べましょう。

2月15日に予定していた演奏会は延期され、2月21日にヘイマーケットの小劇場で開催された。当時の演奏会では、第1部の最初と第2部の最初、そして最後にも交響曲（当時は交響曲のことを序曲とも言った）が演奏されることがあったので、ここでいう「すべて」は、これらを指すのであろうか。そうなるとこの日までに交響曲第1番変ホ長調 KV 16以外にも交響曲が作曲されていたことが推察される（交響曲第4番二長調 KV19および交響曲へ長調 KV 19a）。4月9日付の「公衆新聞」には次のような広告が掲載された。

ヨーロッパのもっとも偉大な音楽家たちの讃嘆の念をまさしくひきおこした著名な幼い音楽家の子供たちの父親であるモーツァルト氏は、まもなく英国を去るつもりであるが、出発に先立ち、これら幼き神童たちの公私にわたる演奏を今月末に音楽会を催すことによって一般聴衆に聴く機会を提供している。この演奏会は主として、8歳の少年である彼の息子によって指揮が行われ、その作曲になる序曲すべてからなっている。

入場券はソーホー区、スリフト通りのウィリアムスン氏宅のモーツァルト氏から求められ、1枚5シリング。同所においてになり、入場券、あるいはこの少年によって作曲され、かつ王妃陛下に献上されたソナタ集（定価10シリング6ペンス）をお求めになりたい紳士淑女諸氏は、平日は毎日12時から2時まで在宅中のこの家族に会い、なにか初見で弾くものを彼に求めるか、低音なしの曲に、ハーブシコードに頼らずに、即座に低音を書き出すことで、彼の才能をさらに特別にためてみる機会を得るであろう。

演奏会の日時や場所の予告は、いずれそのうちに行われる。

その後、5月13日に演奏会が行われた。演奏会当日の「公衆新聞」に広告が掲載されている。ここでも交響曲が演奏されたことが記されている。

自然の驚異たる13歳のモーツァルト嬢ならびに8歳のモーツァルト氏の慈善興行のために。ブルーワー通りのヒックフォードの大広間で、本日5月13日、声楽および器楽の音楽会が催される。出し物はこの幼い少年自身の作曲になる序曲全曲。声楽の部はクレモニー嬢。ヴァイオリン協奏曲はバルテルモン。チェロ独奏はチリ。ハーブシコード協奏曲は幼い作曲家およびその姉で、それぞれひとりずつのソロと二人ともどもで演奏する。入場料は1枚5シリングで、ソーホー区スリフト通りのウィリアムスン氏方、モーツァルト氏から得られる。

1765年7月24日、モーツァルト一家は、ロンドンを後にし、司教座聖堂のあるカンタベリーに留まった。そこにロンドン駐在のオランダ大使ヤン・ヴァルラート・フォン・ヴェルデーレン伯がモーツァルト一家をオランダに招待するために訪れた。8月1日、一家はドーヴァー海峡を渡って、カレを経由してハーグに向かうことになった。**レーオポルト・モーツァルトの作曲による交響曲変ロ長調 VII:B6 [KV 17 (Anh. C 11.02)]**は、出版社のアンドレによりモーツァルトの遺品から発見された。アンドレは、楽譜の状況からモーツァルトが1760年代に旅先で書いたものだと考えた。ルートヴィヒ・フォン・ケッヘルが1862年にモーツァルトの作品目録を編纂した際、これを2番目の交響曲であるとし、KV 17の番号を付けた。前述した2月21日や5月13日の演奏会で交響曲第1番変ホ長調 KV 16と共に演奏されたと考えたのである。

しかし、ケッヘルは使用五線紙や筆跡がモーツァルトのものとは異なるため、当初から真正性を疑問視していた。その後、ランバハ・ベネディクト会修道院のオーバーマイヤーが1768年に編纂した1300曲以上を集めたテーマカタログ *Catalogus musicalium et instrumentorum ad chorum Lambacensem pertinentium* に、この交響曲が、2つのヴァイオリン、ビオラ、バスの編成で、レーオポルト・モーツァルトの作曲として掲載されていることが判明した。作曲された時期は、このカタログが作成された1768年以前ということになるが、レーオポルトが1756年7月26日に著した「ヴァイオリン奏法」の139頁（塚原訳では107頁）、第7章「種々のポウイングについて」第2節「様々な音符によりなる音型におけるポウイングの変化」の譜例16に、この交響曲の第2楽章のテーマがヘ長調で（交響曲は変ホ長調）で記載されていることから、そのころには作曲されていた可能性が指摘されている。レーオポルトがわざわざ「演奏会で取り上げられる交響曲は、すべてヴォルフガング・モーツァルトのものです」と手紙で伝えていることから、ひょっとしたらヴォルフガングにオーボエとホルンを追加させて、父親のではなく息子の作品として演奏させようとしたのかもしれない。ホルンはB管の指定で記載されているが、これが高いB管（B alto）で演奏するのか、1オクターブ低いB管（B basso）で演奏するのか、作曲者自身が指示することが少ないため様々な議論がなされている。おそらく、当時の習慣として自明だったのであろう。旧モーツァルト全集は、この交響曲を交響曲第2番 KV 17として出版した際、B bassoの指定としたが、その根拠は極めて乏しい。ここでは詳細を述べないが、当時の習慣がB altoだった説を支持し、本日の演奏では、試験的にB altoで演奏することにした。



レーオポルト・モーツァルト著「ヴァイオリン奏法」

ファゴットと管弦楽のための協奏曲変ロ長調 KV 191 (186e)は、1774年6月4日にザルツブルクで作曲された。この4日前には2本のヴァイオリンとオーボエ、チェロが独奏楽器として登場する「コンチェルトーネ」八長調 KV 190 (186E)が書かれている。ケッヘルカタログには、オットー・ヤーンがケッヘルにもたらした情報として、レーゲンスブルク近郊のミュンヘンホーフエンの議員ラブルが入手したタデーウス・フライヘル・フォン・デュルニッツ男爵（1803年歿）のコレクションにモーツァルトの作曲によるファゴットとチェロのためのソナタおよび、ファゴットのための3つの協奏曲（八長調1曲と変ロ長調2曲）を含んでいた、と記載されている。そのため、この曲はデュルニッツ男爵のために作曲されたと考えられてきた。しかし、男爵が保有していたと思われる彼の目録にはモーツァルトによる74作品が収録されていたが、ケッヘルカタログに記載された情報とは異なり、これらの作品は含まれていない。デュルニッツ男爵は、ミュンヘン宮廷につかえる軍人（陸軍少佐）の貴族で音楽愛好家としても知られ、アマチュアではあるもののファゴットの演奏レベルは相当高かった。

モーツァルト父子は1774年12月初旬にバイエルン選帝侯から委嘱された「偽りの女庭師」のKV 196上演のために、ミュンヘ

ンを訪れた。その際に、デュルニッツ男爵と出会い、モーツァルトは彼に6つのクラヴィーアのためのソナタ（第1番～第6番）を書いている。1777年10月23日に書かれたモーツァルトから父に宛てた手紙に「デュルニッツのために書いたおしまいのソナタニ長調」とあることや、1784年6月9日付の父への手紙に「トリツェッラにも別の三つを渡しました。そのうち最後のニ長調の曲はミュンヘンのデュルニッツのために書いたものです」とあることから、クラヴィーアのためのソナタ第6番ニ長調 KV 284（205 b）のみがデュルニッツ男爵のために書かれたとされているが、自筆譜の筆跡研究の結果、第1番から第6番まで1775年に一気に同じ自筆譜に書かれていることから、これらの連作はデュルニッツ男爵のために作曲されたと考えるのが合理的である。そして、ファゴットとチェロのためのソナタやファゴット協奏曲もその折に彼のために作曲されたと考えられてきた。そうすると、「1774年6月4日ザルツブルクにて」の日付は何を意味するのであろうか。この日付を書き入れたのは、モーツァルトではなくオフエンバッハの出版業者ヨーハン・アントン・アンドレである。この協奏曲の自筆譜は失われているが、1800年頃にはアンドレの手元にあったことは疑う余地がない。なぜなら、1805年に出版されたパート譜（出版番号2150）には「自筆譜による作品96」と記されているからである。その後、アンドレは、自筆譜は盗まれたと発表し、今日に至るまでいまだに発見されていない。自筆譜にこの日付が記載されていた可能性は高く、そうすると、デュルニッツ男爵のために作曲したのではない可能性が出てくる。前述した通り、デュルニッツ男爵の目録に掲載されていないことから、ザルツブルク宮廷楽団のファゴット奏者のために書かれたとする説があることを付記しておく。

2019年1月10日 武本 浩

【参考文献】

1. Erik Smith: Johann Christian Bach, 6 Sinfonien op. 3 Sinfonia V F-Dur, Doblinger (1970).
 2. Heinz Gärtner, Reinhard G Pauly (translated): John Chrisita Bach, Mosart's Friend and Mentor, Amadeus Press (1989).
 3. Gerhard Allroggen: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Bühnenwerke, Werkgruppe 11, Band 1, Bärenreiter Verlag (1984).
 4. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989).
 5. Cliff Eisen: Leopold-Mozart-Werkverzeichnis, Wißner-Verlag (2010).
 6. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadeus Mozart's, 8. Aufgabe, Bärenreiter Verlag (1983).
 7. Franz Giegling: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 14: Konzerte für ein oder mehrere Streich-, Blas- und Zupfinstrumente und Orchester, Band 3: Konzerte für Flöte, für Oboe und für Fagott, Bärenreiter Verlag (1981).
 8. Franz Giegling: Kritischer Bericht, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 14: Konzerte für ein oder mehrere Streich-, Blas- und Zupfinstrumente und Orchester, Band 3: Konzerte für Flöte, für Oboe und für Fagott, Bärenreiter Verlag (1986).
 9. カール・フェルディナント・ポール著, 海老沢敏, 大久保一共訳: ロンドンのモーツァルト, モーツァルト叢書 13, 音楽之友社 (1992) .
 10. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1979) .
 11. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980) .
 12. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集III, 白水社 (1987) .
 13. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集IV, 白水社 (1990) .
 14. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995) .
 15. レオポルト・モーツァルト著, 塚原哲夫訳: バイオリン奏法, 全音楽譜出版社 (1974) .
-

大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

Intendant: 武本 浩

Konzertmeister: 大西 正人

Violinen: 濱田 利正 久保 聡一 佐藤 奈津子 塩沢 まり子 田邊 明子 筒泉 直樹

藤井 聡子 横小路 美貴子

Bratschen: 能勢 徹 堀井 博子 満多野 穂高

Violoncelli: 加納 隆 加納 千聡

Kontrabäße: 松本 大樹

Oboen: 小林 靖之 利谷 久美

Fagott: 筒井 華代

Hörner: 武本 浩 中根 慎介 北脇 知己



大阪モーツァルトアンサンブル 第 69 回定期演奏会 (モーツァルト劇場共催)

高橋英郎訳詞による日本語版「コジ・ファン・トゥッテ」KV 588 演奏会形式

日時：2019年6月23日(日)午後4時開演

会場：栗東芸術文化会館さくら大ホール (JR 琵琶湖線栗東駅より徒歩5分)

四方典子 (フィオルディージ)、中原由美子 (ドラベツ)、蔵田雅之 (フェランド)、萩原寛明 (グリエルモ)、西村薫 (デスピーナ)、萩原次己 (ドン・アルフォンソ)、掛川歩美 (チエンバロ)

亀岡混声合唱団 第 30 回定期演奏会

日時：2019年11月17日(日)午後2時開演

会場：ガレリアかめおか響ホール

曲目：レーオポルト・モーツァルト ミサ・ソレムニス 八長調 I:C2

指揮：板倉計夫 合唱：亀岡混声合唱団 管弦楽：大阪モーツァルトアンサンブル

石澤整形外科 (医師：石澤 命仁)

診療科：整形外科、外科、リハビリテーション科、リウマチ科

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9時~12時)	○	○	○	○	○	○
午後 (5時~7時)	○	○	X	○	○	X

豊中市本町7-2-16
TEL: (06) 6852-3371
FAX: (06) 6852-3362

大阪モーツァルトアンサンブル 演奏記録

弦または管楽器と管弦楽のための協奏曲

Werk			Tonart	KV Nr.	Solist(en)	Ort	Datum
Konzert	für Violine	Nr. 1	B-Dur	KV207	Tomoko Tagawa	Toyonaka	25.Juni 2005
Konzert	für Violine	Nr. 2	D-Dur	KV211	Tomoko Tagawa	Toyonaka	24.September 2006
Konzert	für Violine	Nr. 3	G-Dur	KV216	Junko Suzuki	Toyonaka	26.September 1987
Konzert	für Violine	Nr. 3	G-Dur	KV216	Miwako Abe	Kyoto	17.November 1993
Konzert	für Violine	Nr. 4	D-Dur	KV218	Koichi Hibi	Toyonaka	7.September 1986
Konzert	für Violine	Nr. 4	D-Dur	KV218	Chika Yamashita	Kyoto	30.Juni 1994
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	Noriko Kohzai	Kyoto	19.Oktober 1989
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	Hisako Hashimoto	Kyoto	19.Jänner 1993
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	Hidemichi Kimura	Toyonaka	14.Jänner 1995
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219/261	Takumi Nozawa	Toyonaka	7.Juni 2014
Rondo	für Violine		B-Dur	KV261a			
Rondo	für Violine		C-Dur	KV373			
Concertone	für zwei Violinen		C-Dur	KV186E	Masato Ohnishi Toshimasa Hamada	Toyonaka	27.März 1988
Concertone	für zwei Violinen		C-Dur	KV186E	Mariko Shiozawa Tomoko Yamane	Ohtsu	7.Juli 2002
Konzertante Sinfonie	für Violine und Viola		Es-Dur	KV320d	Yuki Mori (Vn) Tomoko Yamasaki (Va)	Toyonaka	15.Juli 1989
Konzert	für Flöte	Nr.1	G-Dur	KV285c	Kazuyoshi Hashimoto	Kyoto	19.Jänner 1993
Konzert	für Flöte	Nr.1	G-Dur	KV285c	Kazuyoshi Hashimoto	Toyonaka	27.März 1993
Konzert	für Flöte	Nr.2	D-Dur	KV285d	Noriko Mizukoshi	Toyonaka	28.April 1990
Konzert	für Flöte	Nr.2	D-Dur	KV285d	Kazuya Nishikawa	Kyoto	30.Juni 1994
Andante	für Flöte		C-Dur	KV285e	Kazuyoshi Hashimoto	Toyonaka	27.März 1993
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	Noriko Kurata (Fl) Chiaki Noda (Hf)	Toyonaka	22.September 1985
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	Tomoko Ichikawa (Fl) Naori Uchida (Hf)	Otsu	21.Jänner 2001
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	Kana Otani (Fl) Maho Yamamoto (Hf)	Toyonaka	21.Juli 2018
Konzert	für Oboe		D-Dur	KV285d	Kaeko Sumino	Toyonaka	10.Februar 1991
Konzert	für Oboe		D-Dur	KV285d	Benito Arellano Garcia	Joyo	29.April 2007
Konzert	für Klarinette	<Rekonstruierte Fassung für Bassettklarinette>	A-Dur	KV622	Hisashi Mito	Ritto	28.Mai 2006
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Hisashi Mito	Toyonaka	13.März 1985
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Alfred Prinz	Takarazuka	13.Juni 1986
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Shin'ichiro Ohkawa	Toyonaka	14.Juni 1992
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Yumiko Nagira	Toyonaka	10.März 2002
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Kyoko Kato	Toyonaka	31.Oktober 2010
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	Kuri Takeuchi	Toyonaka	22.Juli 2017
Konzert	für Fagott		B-Dur	KV186e	Shosuke Oka	Toyonaka	29.April 1992
Konzert	für Fagott		B-Dur	KV186e	Mai Tsuneda	Neyagawa	20.Jänner 2019
Rondo	für Horn		Es-Dur	KV371	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.1	D-Dur	KV386b	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.1	D-Dur	KV386b	Chiemi Kosaka	Toyonaka	27.Juni 2015
Konzert	für Horn	Nr.2	Es-Dur	KV417	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.2	Es-Dur	KV417	Chiemi Kosaka	Toyonaka	27.Juni 2015
Konzert	für Horn	Nr.3	Es-Dur	KV447	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzert	für Horn	Nr.4	Es-Dur	KV495	Masaaki Kawanishi	Toyonaka	2.September 1984
Konzert	für Horn	Nr.4	Es-Dur	KV495	Ryo Koyama	Toyonaka	14.Mai 1988
Konzertante Sinfonie	für zwei Flöten, zwei Oboen, und zwei Fagotte		G-Dur	KV320	Chieko Mori (Fl) Hiroyuki Ohmori (Fl) Masakatsu Inoue (Ob) Kumi Toshitani (Ob) Shosuke Oka (Fg) Makiko Hattori (Fg)	Toyonaka	6.Juli 1996
Konzertante Sinfonie	für Violine, Viola und Violoncello		A-Dur	KV 320e			
Konzertante Sinfonie	für Oboe, Klarinette, Horn und Fagott		Es-Dur	KV Anh. C14.01			

Goffigony Amadi Mozart^{ca}
